

俳諧新選序



昔ハ古人乃自其海ニ古ニシ
トシテ其ノ頃自ニ其ノ集ニシテ
道ニシテ古人ノ自ニ其ノ集ニシテ
トシテ今人其自ニ其ノ集ニシテ
トシテ果ニ其ノ集ニシテ其ノ集ニシテ

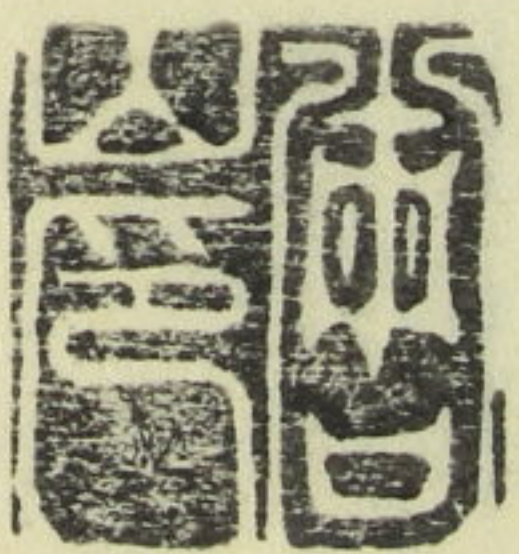
たれを今に於ていふはなる目にもまじ
此稿の中亦は早急なれどもさうなる程に
並に撰びて古くは後編に
ししはしと世に於ていふは
まゝなる目もさうなれども
しはしと世に於ていふは

新つていふは又同じ
うらさるるや抑もさうなる
社よりいふは又同じ
風解る程にさうなる
いふは又同じ
今にさうなる

ついでに時をいひます

安永二年癸巳三月中浣

滄浪居士主人書



凡例

作者の可と不可をわきまを置かざるに依りて。他國のこれ
ある所も皆これをきりぬ。されども其を其に依りて
んは通し。

選中。京多の他國に於ける。自ら其の
うきゆき。知るその。藤細より。取在
こと。あつた。は。す。

い集む。い。ま。あ。ら。う。め。り。何。を。い。て。白。と。ま。す。

いん事をと請いとせられた。わらわは、さしつかへなく
世にの事とせよ。然るに、世にの事とせよ。世にの事とせよ。
世にの事とせよ。世にの事とせよ。世にの事とせよ。
世にの事とせよ。世にの事とせよ。世にの事とせよ。
世にの事とせよ。世にの事とせよ。世にの事とせよ。
世にの事とせよ。世にの事とせよ。世にの事とせよ。

一 久しうおぼせし人といふ。世にの事とせよ。
久しうおぼせし人といふ。世にの事とせよ。
久しうおぼせし人といふ。世にの事とせよ。
久しうおぼせし人といふ。世にの事とせよ。
久しうおぼせし人といふ。世にの事とせよ。
久しうおぼせし人といふ。世にの事とせよ。

志ありてまはれる。世にの事とせよ。世にの事とせよ。
志ありてまはれる。世にの事とせよ。世にの事とせよ。
志ありてまはれる。世にの事とせよ。世にの事とせよ。
志ありてまはれる。世にの事とせよ。世にの事とせよ。
志ありてまはれる。世にの事とせよ。世にの事とせよ。
志ありてまはれる。世にの事とせよ。世にの事とせよ。

一 世にの事とせよ。世にの事とせよ。世にの事とせよ。
世にの事とせよ。世にの事とせよ。世にの事とせよ。
世にの事とせよ。世にの事とせよ。世にの事とせよ。
世にの事とせよ。世にの事とせよ。世にの事とせよ。
世にの事とせよ。世にの事とせよ。世にの事とせよ。
世にの事とせよ。世にの事とせよ。世にの事とせよ。

此のりりたるものか。かゝる人々のあはれは、
ひつこすわやまのりりたるものか。かゝる人々のあはれは、
自向の取を山にひく。かゝる人々のあはれは、

嘯山誌

惣論

一論、すく争ふれば、あはれなる人々のあはれは、
志の取を山にひく。かゝる人々のあはれは、
不公なる人々のあはれは、
中へ入る。かゝる人々のあはれは、
すく争ふれば、あはれなる人々のあはれは、
一見せし。かゝる人々のあはれは、
宗因甚く意の取を山にひく。かゝる人々のあはれは、

之より類は。中排行して層と云ふ。於て
 可成しく思はる。其の廣き古今の詩業
 ともて風格の源をたゞし。類自解ゆ。
 其れ中より蕉門の東派。代少種。乃各自とて
 辨り。自ら心風く。こゝろ事。宛と不交不馳
 法華秘事。つれも難す。こゝろ苦。甚其の骨髓
 と云ふ。事能を。海。將。後。不。端。り。る
 かり。これ。蕉。門。の。性。古。風。より。極。極。に。極。す。

之より類は。中排行して層と云ふ。於て
 可成しく思はる。其の廣き古今の詩業
 ともて風格の源をたゞし。類自解ゆ。
 其れ中より蕉門の東派。代少種。乃各自とて
 辨り。自ら心風く。こゝろ事。宛と不交不馳
 法華秘事。つれも難す。こゝろ苦。甚其の骨髓
 と云ふ。事能を。海。將。後。不。端。り。る
 かり。これ。蕉。門。の。性。古。風。より。極。極。に。極。す。

かよき徳の國にありては人々の心を安んずる
爲ふに。許すを考より備ふをより。その才を
爲のふをもちて。その徳を。その徳を。その徳を。
一風を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。
其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。
其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。
其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。
其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。
其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。

く後唱るべし。其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。
其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。
其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。
其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。
其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。
其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。
其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。
其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。
其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。
其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。其の徳を。

金月好宗
号素竹

い所の年を太祇言多くあやせし
二所の年の中よりおとりおれし
の集は末に加入せしむるもの
かきあけしむるものいれしむる
一とれと白とを情の生息小
むらじくえん

次句えんは夜現れおふまきく 太祇

山を朝日短繁乃月 嘯山

ちやうとれ鳴をを解しあ 全

二所の望し今と大烟 祇

汐の守細江のまゝ生息中 全

菊三所のまきく鶴のぬい柳 山

山屋まふおれしとふらうとら 全

笠へおれし花の日備ふ人 祇

西風これ大守切小切也 山

押合ふらり算帳の秋 祇

あゝん系力なまはれらうら 山

澄み乃時守し神と川まき 祇

沐糊三寸糸くせき後うん 山

休言新選 西吟

蚕んせし聊ふかりそ

たき江都西郡内の子陰丹

こゝろ福活と十けるはの

悔けざる故一人がうけく

風のおしれ中島乃船

生飯前ハ鳥来訓る秋の瑞

法華の註く五年よりなる

涙の言するく折るけり涼し

山 祇

山 祇

山 祇

山 祇

山 祇

山 祇

山 祇

玄孫中事極古う身

後摺帯あきあけおとて

昔る中をうしむきと

あうおゆしハ情にけ命

しやしくせおころうり

履冷しよもさよかゝるを

い川あきしと馳性急

羽さる短冊思家乃の鳥

山 祇

山 祇

山 祇

山 祇

山 祇

山 祇

山 祇

非借新選

西吟

三

俳諧集選 西語

菜乃之難と清く結り	山
灯もほのぼのたるぬき頼	山
長吏の虎脚と事ゆへ	山
物子のいゝとつとて夢と立	山
合奏すゝ練堀の内	山
ふらふらふふとやいふ花曇	山
柳乃の葉は前々 花	山

補遺

初櫻 糸櫻

出し入らむればはゆやふはら	奥山
初きくく花のころも糸を	佛仙
咲をくくくくくくくくく	嘯山
えある桜皮の破風と糸櫻	蘭丈
近衛殿の太物入やうはら	尺布
糸櫻がうハ風はるもく	旭扇

俳諧集選 西語

松風やゆり江戸 空をわけの春 宋阿

ゆりくしとゆりゆりゆりゆりゆりゆり 宋屋

奇矯やへいひふふふふふふふ 春江戸 珪琳

月とゆりゆりゆりゆりゆりゆり 太祇

乙地よゆりゆりゆりゆりゆり 雅因

起しくもまふゆりゆりゆりゆり 萬翁大坂九草更

子ゆりゆりゆりゆりゆりゆり 茶雷同

ゆりゆりゆりゆりゆりゆり 麻齋伊勢

元日を一日ゆりゆりゆりゆり 卯雲江戸

安き夜をゆりゆりゆりゆりゆり 瓢水播 別府

春來ゆりゆりゆりゆりゆり 春來江戸

古びゆりゆりゆりゆりゆりゆり 仝

ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり 百萬聖代

生るゆりゆりゆりゆりゆりゆり 野有尾張

春一まゆりゆりゆりゆりゆり 丈石

元日をゆりゆりゆりゆりゆり 湖十江戸

備言集選

書物や書物といふりれ跡江戸永機

ゆゆしく此の事と笑ふ也尺布

竹を起て高吹り守物目ふ松任素園

大坂の坂より入ぬ門の春大坂同來

春の氏や春のれとのゆれ春梅有馬京馬

え白れんわきれわきりの雨雅因

空のもしくおぬる春の終り梅福原嘯山

午の道小電お軍のゆき梅福原貝錦

え白や梅よりくひと古くを同篤羽

野もも春のよのゆれ福寿草梅三品坊二柳

けさる春のゆき書物人左釣

ゆき梅泊ゆきを起るる李流

ゆき大坂ゆきを起るる布門

若菜七草子日竿秋

花さくゆき書物人左釣若菜人陸奥中野蘆風

仕下は春の書物人左釣若菜人陸奥中野蘆風

備言集選

三

七節のや見ふ國名 是 所 無伊 若山 其村

七節のや何れも 必 化

七節のや何れも 歌 水

七節のや何れも 存 義 江戸

七節のや何れも 龍 眠 同

七節のや何れも 九 可 兼 桑島 僧

七節のや何れも 太 祇 上野

七節のや何れも 桐 雨

裾 袂 活 々 雷 丸 丸 菜 菜 大坂 之 祐

は 菜 菜 の 夢 初 々 々 菜 菜 式 大津 可 風

猿 引

猿 引 や 家 々 々 々 赤 羽

猿 引 の 杖 杖 杖 杖 社 中 出坂 田原

風 呂 敷 猿 引 猿 引 猿 引 它 谷 福原 福原

猿 引 や 猿 引 猿 引 左 釣

猿 引 や 猿 引 猿 引 孤 桐

休言雜選

鷺

鷺のれ人事もや妹より恋をうけ 嘯山

鷺のそ息もえ遠きか日南うけ 雁紫

くひのや妹にわよれ物積横 多少

端古しや鷺よ、顔もえうとん 蓼太

鷺のや湖水をななくはくく波 渠柙

鷺のや雲のうらむる礼者あり 萬翁

くひとのすやと餅もあのおほふふ 泰里

鷺のうらうら声や竹の奥 希因

くひとの水柱あしと物集 龍眠

くひのや末を不火とくく言 知石

鷺はあらこらとすくや小家傍 蕪村

鷺ふふ交配されく森ええとん 金龍

鷺のれをとりてんか、まきさる 宗雨

鷺のや松もまきく 南うけ 潭北

くひのや庭樹の傍を、市の所 太祇

休言雜選

カ金沢

美濃

七津二百坊

下野鳥山

俳諧新選

夢入夢々点々 一やまきくね 五上 柳居

夢や珠簾少あまきて鳴も耳 肥前 手戸 石泉

くひやちや初寝ひの竹乃真 素園

夢れ日申後一軒端く柳 越前 石部 其丸

舞多の存りちかれく梅の花 宋屋

くひはと下はて清と向袖も八 野有

夢や岩を縫ひあの上 大塚 淡々

夢や師もふ来と分るはあす 伏見 柳女

夢や撮く物逢ふ道明寺 甘藷 大江

夢や傘はげしきももる 下 佐々山 岳陽

夢に物もかゝす 下 藤巻城 雁宕

夢と息と入合守寝起 茨前 浮風

涙のるに教くくひそのる 可幸

くひやちや取く出くえ 光江

萬歳 春駒

夢や夢々十と又の足松子 存義

俳諧新選

まの跡の胡弓の糸乃もるん 嘯山
まの跡の男影なる女乃子 太祇

蜜引 年玉

投おまを已引のー胸ふる 太祇
宝引の和素裸うくえをん 嘯山
宝引や麻上下の碎えんか 一 兔
宝引やとまの河あ糸糸う甘ん 之 房
まの玉の抽れ糸うめり家の集 江戸 米仲

年玉や海女志ゆけり 太祇

初寅

初寅や慈つゝ赤江の糸乃 太祇

残雪 雪解

追ふ小塔の糸乃やまれ 者 二 柳
や山やとまの河あ糸糸う甘ん 日之妻仲中川の言解う仲 太祇
雪解乃盤より糸乃流る 赤羽
山より糸乃盤より糸乃流る 李流

梅紅毒

梅紅毒

強りく一葉の大坂龍眠

咲る人のけしき大坂李雨

小梅もほろろ岩沼祇川

草小が萎れ日葉折射牛

各々や母愛のしるし宋屋

はまよく梅淡々

百姓の調岩山

梅はくも尺布

白既白

白梅樊川

春のや太祇

梅も柙居

柳も八穂

つし沖三

是の武然

梅紅毒

和言集

梅嗅しむけりかなり二月壬し二

しめりや風乃落つるふと 宗雨

浜の梅約も二粒と粒うね 移竹

梅くまを干綱と祈らふ鳥哉 存義

ゆわると此方より陽出る梅花 野有

菱之けいさきとこ城やじめの毛三ノ岩手 萬裏

梅うまふるはワカヤ 嘆息おんふ 井ヒ

吹きしめ笛ふし生るり梅のぬ 龍眠

色しむの柳れ字や梅くれ 和流

夕月の面影し梅葉ゆへ 無名氏

神あふ梅るるくや雪の生来 光江

梅くまをハ梅さきくお守り 素園

古き砂の巨魁蒲團や室の梅おん梅 嘯山

ゆゆてらんるるさきし梅くれ 卯雲

月と白くおふさきくや梅くれ名ハ河原虎 半魯

獨座や梅くらまぬおふし 信應

和言集

九

まるね梅の白きや野乃夕
 鼓舌
 梅もさう清くも咲みたり
 茶雷
 押合く紅毒さね枝浪重伏見
 賀瑞
 紅梅やうらま遠く築比裏
 風之
 赤梅や町家よばを古御殿
 貝錦
 紅毒く時めく家の光うね三原
 毛佛
 赤梅のらるや幸乃鳥つと
 太祇

白魚

白魚のいづく遊ばぬ糸の糸
 宋屋
 白魚や寝るひ鮎れ赤ひた
 赤羽

猫戀

わくわく女猫のねやぬの音
 木雞
 声合す妻戸乃窓や梅乃虫
 嘯山
 余のゆいさひ推さる猫の糸
 可幸
 秋のよよまふんさくのや猫の虫
 貝錦
 やふのを清み言わり梅の糸
 加長崎十

御言新選

けり猫くそくそれく尻り 土 髪

志猫やけきまれく指るそら声 之 房

福このく足念ぬきく人書ふきり 丈 石

茶うまゆる下種けく猫の心 太 祇

あれと夢のあふきり猫の意 五 仙

のく猫とく目の言まそく時部 里 鳥

ふれくも季と鳴ゆる猫の爪 龍 眠

さう猫はまらしたの嵐うね 青 楓

嵐を思ふ葉のぬや猫の意 樓 川

けり猫は早ちつゆ糸きり 子 曳

御忌

念ゆ。睡ぬ月や清忌まら 鶴 英

市忌の結傳てゆきも書あり 移 竹

題のあふ糸とそな市忌結 蕪 村

思ふ物を智小送也ありの結 嘯 山

清志記る書ふあふ結 雅 因

御言新選

俳諧集選 春

餘寒

雪をふ目や春先つゆ高はるゆ 習先

梅もつそ花をふさきさる 麦翅

梅咲くく水辺のさかきさる 瓢水

くひとふ心のりぬこしも外 蘭丈

草芽 若草 木芽

風うきわく物れうくしよ草の芽 伏見 鷺喬

わさ草や帆のゆらあける境浅 嘯山

芽之まきの八百屋物人 草 太祇

わさ草やまをぬぬれ 中 直井

目とえの幹より重なる木芽 赤羽

若草や花つけふんちり 龍眼

若草や花くさか 大坂 雅因

うらぐく 大坂 有河

馬と豆多し 三原 梅史

又波ら 三原 季遊

俳諧集選 春

十一

あふもくはれ裾まじふらり 樊川

美草もやまげふよき沼の辭 フク原 沙月

わらまの牛の存るはる落網 瓜流

凍たさうき美草もあふる川辺式 湖柳

あふもやまげふよき沼の牛連ん 自友

数入

あふ入やたふるまふ里へてはねを 珪琳

あふ入や隣やとせくまはる 支鳩

数入よ母の教や長もらく 江戸 李文

あふ入乃三寸とてくははれ哉 龍眠

あふ入や二音もやの娘也 文誰

あふ入や春かたはる寸親のあ 太祇

あふ入や河をのた山くまはる 嘯山

春雨

あふもよまはれ翠やまのぬ 雁嘴

あふけふ雉のまもまら雨 江戸 凉体

俳諧新選

春の鳥 支庫 支鳩

春の鳥 七内宮 許適

春の鳥 淀 富葉

春の鳥 嘯山

春の鳥 伏見 班霞

春の鳥 隨古

春の鳥 移竹 移竹

春の鳥 宋屋 宋屋

春の鳥 太祇

春の鳥 武然

春の鳥 多原 周蛇

春の鳥 伊勢 麦浪

春の鳥 五江 孤山

春の鳥 車庸

春の鳥 井波 陸史

春の鳥 樓川

俳諧新選

四一

春風くほく 桐壁をとり

蕪村

春風や 櫻を移る 白も惜るに

寫北

春風や 山吹うたふ 梅も春

素園

春の由も 紙に伝へ 春の由

青岐

春の由す じ方の 春の由

千仞

路花 土筆

春も来る 春は 春の由

孤桐

春の由 春の由 春の由

麦翅

春の由 春の由 春の由

左釣

春の由 春の由 春の由

一兔

春の由 春の由 春の由

太祇

春の由 春の由 春の由

移竹

春の由 春の由 春の由

蘆洲

春の由 春の由 春の由

龍眠

春の由 春の由 春の由

沾洲

春の由 春の由 春の由

丁梅

雉

雉の声つゝくろや 孤桐	けんりし早き雉の音 子一	鳥原の音ぬふきり雉の声 賈友	<small>夜をたしむる此門や雉の音 遠くは遠くそとにありき</small> 嘯山	几とや何ふ湯きく雉の音 蕪村	獵人の音とつゝぬや雉の声 大夢	ねきとらんとりやきりの音 晩平
----------------	-----------------	-------------------	--	-------------------	--------------------	--------------------

やく東回ら雉の音 赤羽	梅書のやふ雉の音 麥翅	こらくと煙好ふ雉の卵式 龍眠	終遠くつれとある鳥の音 太祇	西日扇の雉の音 此流	書初守きりの音を聴け <small>味添</small> 羽律	雲雀	雉の音つゝくろや 榮瀧
----------------	----------------	-------------------	-------------------	---------------	---------------------------------------	----	----------------

入心人れく尺子もや親き程 龍眼

三日月のよう下りるむらりけ 嘯山

子を重くも免あめ鳴き程 眠栞

りくく入居れ古くぬき程 雁宕

免体く又まきり一癖も中程 炎山 山僧 新僧

夕雲雀のゆきとまはるぬ 蘭丸

海魚とくくくも中程 之房

我志すきと程より程も程 鄙决 肥前 大村

之川と川と入るれ中程 素園

隈より記やふかしく程 六渡 カマ

若くも程もあふりる中程 長木

初午

初午や和洞の後の稀一今 存義

初午や飯個は乃内乃時 嘯山

獨活

獨活よけん尾も末の強運も池 雅因

保壽集 卷之六

山こ々木まのたのほうさるね 太だ祇ぎ
福ふ活くわよよはい背せとお伸のとあるまん 嘯せう山さん

接樹 指芽

接けつ木ぼくくく物ぶつののくくききわわふふ 可か幸さう
ままめめののああくくんんのの接けつ木ぼく式しき 麥ばく翅てい
つつはは使しぬぬままをを使し一いち種しゆゆゆくくをを 太たい祇ぎ
目め和わんんくくははんんののままるる家かんん 之し房ぼう
わわかからら小せうままいいぬぬきき芽め式しき 李り收しゆう

涅槃

福ふくををんんのの福ふく者しや集じつのの川がわももんんののおおんん 百ひやく萬まん
神しん子しのの作しやくのの佛ぶつのの二に月げつのの那な 蓼れう太たい
新しん造ぞうののままををここ白はくままのの蔭いんのの方ほう 習しゆ先せん
指しゆとと説せつのの妙めうをを結けつすすんんか 孤こ桐とう
位いややとと画わくををくくらら涅ねつ槃ぱん像ざう 稻だう音いん
右みぎのの果くわわわらられれ緋ひんん袈かええ像ざう 社しや中ちゆう
ららくくももつつりりとと右みぎのの果くわのの果くわををりり 赤せき羽う

非語所選

十八

新編雑書

其

柳

尼のちる神よあそぶ柳の柳 存義
 下宮のうき若湯のけり方柳式 春來
 くる常のく紫帯てんくる柳の柳 早世 菜根
 けり方と紫帯てんくる柳の柳 伏見 雨谷
 風の白い人よあそぶ柳の柳 平戸 一松
 けり方と紫帯てんくる柳の柳 自笑
 帆よ連てんくる紫帯てんくる柳式 篤羽

春柳のちる神よあそぶ柳の柳 之房
 花の白い人よあそぶ柳の柳 嵐山
 白帯も柳の柳よあそぶ柳の柳 尺布
 春のけり方と紫帯てんくる柳の柳 麥翅
 ふる常のく紫帯てんくる柳の柳 如全
 棹のちる神よあそぶ柳の柳 一兔
 下るれり奥志つくる柳の柳 夕六雨条 社中
 春のけり方と紫帯てんくる柳の柳 漁焉

新編雑書

其

月へく 遊むの 柳 うね 邦 たか 是計
 川端 くわん 柳 うね 移竹
 南雅
 太祇
 髮二
 水翁 みづおきな

永志 ながし 柳 うね

嘯山

歸鴈

赤羽
 移竹
 季遊
 嘯山
 兆亮 あきあけ
 它谷

まのめしのうへに遠めくこし 麥翅

まのめしのうへに遠めくこし 太祇

連とまのこまをこしやゆき 稻音

蛙

うねりつる地をうめける 蛙音

あの中小持子の音の蛙子 不斐

溜いのそれと生じ蛙の形 桃右

なごころの地の初め地か 凡阿

蚪 蚪 はなれ 山 嘯山

葉山 はなれ 山 土髮

とく はなれ 山 牛行

死え はなれ 山 為文

はな はなれ 山 百里

ふ はなれ 山 雅因

蛙 はなれ 山 泉明

草 はなれ 山 和

灯とくちかたさるれく蛙子 孤桐

鳥巢 雀子

鳥の巢や啼るうねれは鳥の倦 嘯山

初春の巢をこころ悪るそもる 可幸

雀もやねりやうけのこもつと 赤羽

巢さらして寝るねは雀も雀の子 嵐孫

巢のさう小初もやうやなく雀 習先

飛りぬきとて言や初すし地 召波

初春とてまともひや初はらめ 它谷

山櫻 初櫻 糸櫻

振神のつらさ物や心さう 武然

遠月乃合ぬ隣りや心さう 賀瑞

峰頂層々をくささきけ心橋 上平 羅雲

初春のくささかやわらう心さう 隨古

おしとくを羨しやうさや心橋 大坂 羽幸

すのこもくはくささか心さう 孤桐

俳諧新選

七二

風をよめきよきしほくく山嶽	龍眼
是くく男くくや心くく	富水
水の樹おききく一穂も山嶽	雨谷 <small>伏見</small>
何くすれく端くきく一山く	素園
おききくく女は入ぬ心くから	原松 <small>イカ</small>
八百石の海井中や心く	猪草 <small>名</small>
山嶽母坂の風を来きく	雅因

田螺

山くすむははるるあめく	止角 <small>子江</small>
湖れあくくもきく山田螺く	鶴英
目を負くく田螺滑ふく	大夢
徒多く。越れ中のためく	存義
あくくくくくく山田螺く	移竹
くくあくく田螺くくく水の名	嘯山
遠くくくくく山田螺く	雁宕

永の白小房とくまぬ田螺兵コ 麻兄

椿

ほろくく比多屋物伏見 桂ノ村 吳郷

落しとまふ小かくる桂今 鶴英

多めくまるとる桂中新田 呂誰

山里やまおんる 赤桂 嘯山

も言ハ落る桂をぬる傘 龍眠

一旦のぬりけけぬ桂伏見 天露

夕日乳のせまく落る桂子 卯雲

霞

梅此河原の梅の枝や落るあかり 丑二

高瀬船のよとこり 蕪村

春牛乃村とけるき 百池

夏あつの海あつありあつ 太祇

あまじいあまのあまとあま 海の上 習先

ひまあまのあまやあま 嘯山

やうくそおのそくも夕うすく
孤桐

十からうきよるあわらきあり那
雅因

境のきく板の寺のりりきき
雲魚

小鯿 汲鮎

若鯿の浜瀬を波ら光うか
李收

若鮎や川原よ雨れ波うき
貝錦

けき業のうき乃汲鮎やきき
嘯山

鴨くく高野く移る小鮎
李流

毛けけけけ鮎れあきうけ
一兔

燕

巢さうくくそ白ハ成る燕うき
半魯

い移のりや燕の十又き
南雅

燕うきけ二親の思りあり
嘯山

燕やんききうきき子の家
百萬

つばきうけけけあわらき乃也
鶴英

あつらうきうきき乃燕うき
雅因

萬葉集 卷之五 踏子うね

淡香里 露秀

蜂

蜂をく巣と回りまの釣 無名氏

蜂の巣はしのちふちおまふち 晚平

許事よふ小ぼく蜂乃奴 凡流

構るを蜂も聲よめてきりきり 嘯山

ふふ人の人追ふ蜂のころろね かみ 闌更

蜂の巣や十はみ朝の電敷 魯孔

桃

桃うも心と背負一村つき 上ヶ 潭蛟

仄前けハ遊くらりぬ畑の桃 三子 李夫

桃おまけはじられきりまきり 土髪

侍とん別ぬ大やりの花 佐文山 羅雲

工なれ枝のたおちりも 太祇

唇けられる目わぬと里桃の花 紫水

糸の尻よ好れおしき桃花 孤洲

俳諧新選 卷一

廿一

戸をぬくわれとるまじ 桃花 素園

ゆらぎはる風よ浴衣ののむ 淡々

桃さけハ桃よ ぬきり人こころ 赤羽

宵戸つのもろぬ家やまゝるる 関更

ぬれしも 帯白ともしりこのをぬ 桃のまゝ一條屋のまゝうね 嘯山

嘆きね 嘆ひ人まのしりの毛 寐兄

桃さけはる三年三月二百の今 沙龍

生ゆまゝまゝまゝさるる 桃のまゝ 雅因

又今朝のまゝも 推もり 桃を 几圭

寒食

之を今も 長者れ 初の仕 赤羽

寒食や 飯のたを 節名も 嘯山

介子推お七や 小まゝれ 太 太 祇

春水 水ぬき

つりまゝくも ぬく 湖や 春水 早 社中 太 祇

朽り白ぬ 落ぬまゝ 原の 太 祇

俳諧新選 卷一

廿一

俳諧新選 卷一

仰馬の後よ蹴く竹まのぬ まのぬらふに國と遠れきり らあふれつにきりまのぬ 斗綱や寝ちるる海るまはあ なく風を抱く水のぬききり わるるまのぬのぬは其たゆな 燈籠のぬぬぬぬぬぬぬ をあはぬぬぬぬぬぬぬ	敬 蕪 雁 嘯 羽 一 百 多	雨 村 宕 山 律 標 萬 少
---	--------------------------------------	--------------------------------------

湖色ぬきしきりある日柳か 左 釣

春風

蝶鳥れ遊ひ歌やまの風 くのあるぬぬぬぬぬぬぬ そこの豆の歌くハ白しまの風 芝古あき吹きく人やまの風 舌の端ある嫁よ娘とまの風 と月々人しまぬ風々ぬぬ	嘯 孤 青 季 太 賈	山 舟 魚 遊 祇 友
---	----------------------------	----------------------------

二重花の妙すじ幕や雲の風 隨古
志風や日新海や麦乃人 孤桐

蝶

蝶は風やせる吉野の目か
くくや埃の中にとりし
橋より日小そくやある
目小そく蝶のさくね
乃知ると目小蝶さる

樓川 之房 孤桐 赤羽 太祇

数多くは白くは蝶
將に花を羽のせりき小蝶
未花の葉の小蝶や

雅因 ちり 鼓舌

蝶くや野山のさ乃乳房より
と何らとをねをいさ
ふくのちと作り新蝶

嘯雨 鶴甫 貝錦

蝶乃ねまを風ある目
飛く神の蝶の

卯雲 嘯山

非吉

蝶とくろる身の似たりや所の辞
若れ逢く森の如きや花なりと
太 祇

畠とれ蝶よよめる日わづ那
多 少

香ふ舞眠る眠る小蝶ふ
三山
社 柝

いつふ蝶追務ぬちよ乃牛
龍 眠

おれく油きんく睡る小く糸
寫 北

ふくの我けりうまきけりうま
大 夢

花後ゆりしも蝶のふれ糸
杜 支

ふみくや逢る時もあふくと
季 遊

蝶くやとらこのふれはやえ
素 園

出代

出代や舞う運ひのるる声
大 夢

出代やはゆき年ち川のあり
共
蘆 蒿

候るけよお代るを此の物糸
之 房

お代りく守や遠寺の持り夢
嵐 山

お代をくまもあやめくたふあり
七言
諸 彌

常きと夢くお代る親仁る
紫 水

牛竹や梅竹とほり守家の月 移竹

臘月

二三里小まね 猿森やふら月 牛行

さるたをなく 言る由や猿月 渡牛

と衣ふたれ 吐わりおほるう 管鳥

多るうハ女の 絨やおしら月 太祇

お女の身は 此移や 曉月 之祐

うくたれ なるうを 一 猿月 嘯山

馬さくらや 加ふ 齋や ねら月 菜根

月をさ 綴し 緋のうさきり 楚雀

怪さふ 虫の ぬき 眺月 孤桐

板橋の 喜節 たり ち海ら月 吏登

月をく 眺る 座の 野風を 太祇

はぶく といふ 痛る 多や 眺月 文素

赤色の きぬの 蓋りや 眺月 魯雲

又紅雲の なる 田中の 紅や 眺月 舊國

大務

信言新選一春

菊苗

海れるもくはらねす葉の苗 此流

むのひらるれ杖実ん菊の苗 孤洲

くちれる葉のありや苗の日せり 嘯山

雛曲水

元小角に掛らぬものも葉は候 天露

ひまはるふかさる雛と葉は候 一免

幸ひ知らるる雛の料理仙 固有

舟の在れ雛に遇ははしくなり 赤羽

富直すと雛もるまははるま 嘯山

雛のまや嫁小はのくまはは候 孤桐

そとほを化やまうち雛の魚 之房

曲水やいらの君は長柄傘 隨古

如水やあもくくおつもの山 龍眠

汐干

肺サと解るるわやむ汐干サ 廬鳳

非言新選一春

三

伊言集 卷

つらみ 試み 汝干 那 瓢水

白鷺の羽袖をこく 土 髮

鯛突く 土産のこまや 沙干 持 太 祇

涙の糸乃 癖心 くら 汝干 ぬ 赤 羽

夕干 汝干 汝干 持 下 渭 白

持 汝干 ぬ くら 汝干 持 素 園

櫻花

曉山 門あらかく くら 那 松井 カ小松

梅られ 松梅ら 似 梅 那 京馬

いさく 中 岩 くら 吾 那 梅 那 卯雲

綾 くら ぬ 汝干 ぬ くら 那 彈月

又 汝干 ぬ くら 吾 那 梅 那 嘯山

歌 くら ぬ 汝干 ぬ くら 那 梅 那 萬翁

有 くら ぬ 汝干 ぬ くら 那 梅 那 吞江

朝 くら ぬ 汝干 ぬ くら 那 梅 那 五律

園の 梅 那 梅 那 梅 那 梅 那 何堂

非言集 卷

三三三

伊言集 卷之三

三三

はくはく	竹灸	千山	色む	く	水翁
聳	男さ	か	け	く	大夢
羨	し	連	け	う	孤桐
積	の	ふ	日	し	沙月
深	山	ふ	ら	い	守一
ん	る	あ	ま	お	宋屋
か	ふ	あ	ま	お	白芽
山	ゆ	り	あ	ま	龍眠

か	る	果	の	さ	く	ふ	睡	る	林	麋	鹿
お	ま	ん	と	い	ふ	人	ふ	は	く	菜	根
里	の	名	を	よ	め	く	通	る	橋	子	巾
日	の	あ	や	細	を	冷	や	く	特	沙	月
ち	ら	の	う	ま	の	く	墨	條	橋	雁	立
あ	お	り	又	善	く	橋	よ	か	れ	榮	瀧
あ	し	や	う	い	ち	か	る	花	見	雅	因
ち	ら	も	や	ゆ	き	く	志	れ	ね	樗	良

伊言集 卷之三

三三

花の山さしりく向くもさしり 是計

おかけた一樹小きまよ花ん式 太祇

系へおしく聴れ体やむさうり
りさきさき足のまじり花の下 全

花よさきく火の河は師政さきり 大夢

笑貝ねも瘦さり花はるる 寫北

乃さしり小窓むさうりまのぬ 手 けつ

登れくさうさ花のわささ 手 社中

昨日さきさきふあふ花見うね 稻音

海邊ぬあさか白や内花ん 凡流

尺やれささ木のさる忘れ杖 龍眠

酒造くゆるさあや花雪取 土髪

志さしり花さきまのさくさきり 習先

志さしり花さきまのさくさきり 大坂 竹房

身おさきさきと花瓶や師加る根 百萬

傘さしり花の体とあさきり 手 買明

こえさきさきあさきあさきさき式 沙龍

他の花もよほり食見小きり花雪

しほりれりカカ花の宿カカ之柳カカ趙平

あまの湯の妻とて大坂あまの湯大坂春來

切腹大坂他人まのいのち大坂人大坂柳山

小きく大坂沈まるとつ大坂まの大坂花大坂盤大坂羽幸

おきき大坂あけ大坂ま大坂あ大坂れ大坂あ大坂る大坂落大坂葉大坂赤羽

漕大坂出大坂ま大坂や大坂流大坂山大坂ま大坂と大坂花大坂の大坂く大坂淡々

鳥大坂よ大坂の大坂き大坂き大坂く大坂る大坂あ大坂や大坂花大坂の大坂雲大坂成意

花の文大坂様大坂ま大坂ま大坂と大坂は大坂し大坂し大坂し大坂休醉

花守大坂の花大坂も大坂漏大坂れ大坂る大坂さ大坂ね大坂居大坂り大坂湖月

何大坂れ大坂と大坂も大坂目大坂と大坂は大坂は大坂あ大坂け大坂る大坂楮林

尺大坂光大坂の大坂く大坂も大坂の大坂花大坂ま大坂や大坂花大坂の大坂妻大坂隨古

氷大坂舞大坂人大坂や大坂津大坂踏大坂ま大坂ま大坂く大坂花大坂を大坂歌大坂鼓舌

名大坂と大坂ま大坂く大坂て大坂知大坂る大坂白大坂あ大坂る大坂む大坂し大坂ん大坂ま大坂沙月

花大坂の大坂や大坂麻大坂昔大坂花大坂の大坂ゆ大坂ら大坂行大坂雅因

花大坂の大坂ゆ大坂ら大坂行大坂の大坂ゆ大坂ら大坂行大坂麻父

休言雜選

三十五

これのたは後世の節也 伏見 斗吟
何れもよとされぬたるとも 季遊
右川の舟と指す舟楫う那 宋阿
なごころの枝と接く花んふ 千奴

菜花

菜の花は帆も海も入日る 多 雪蕉
菜のしら雨後の音や船楫 賀瑞
菜のたやとらぬとる美言者 休醉

菜の花は磯邊を流るの山 竿秋
菜の花や山嶽の峰は前ねも たの集 未史
菜のしらゆれくたの如きり 尺布
菜の花や川くせする人の声 大夢
菜のしら日なきまを蝶さくも 大 可祥
しらや菜の花咲ぬまこね 馬南
菜の花や右舟ちりまる向ふ山 太祇
菜の花の音か小くも入日る 淡々

非語前集

三十一

兼乃衣や何と下の玉埜 沙月

躑躅

毛氈小ちり師とせむはしり 多少

る此意筒一ふんのつり ははるわりの時や夕月也 嘯山

いふ子條よつるはしり 麦翅

垣をくく妹の位花や白つり 雁宕

眺つて送つてよおはしり 孤桐

打とれがら月を落しおつり 井々

控とこもさうね思ふれ下川 南浦

遅日 永日

まはれ易やわいふまを記ふ山 晚平

歌中 生る自と入日と力なく控水 涼帟

水は自も向へ流とわいさ 可風

水は自もくた記衣の裏つら 大夢

水は自も袖とく記も海の上 孤桐

水は自も山玉の猿乃うけり鳥 嘯山

非格... 集

俳言雜選

鳳巾

くよき風巾系しほ津階式 此流

風巾扱てしる糸やおぼろふ 杜支

うらふれそ危のうらふ風巾 巾中なるを我とむうハ男の子 太祇

梨

梨の花大工の酒小まよきり 毛 御風

浮き雲のそねはわたりやな 毛 佛

後巻やくイゑるなり乃園 蕪村

琵琶

あや宵中あどちるの壺うる 文下

紫くしの枝嫌くくよ森式 太祇

山吹

山吹やほもさくも水小まきさ 三 五筑坊

山吹や女匠通の片お戸 梅史

山吹よむ乃ふれ日飾 五 沾涼

山吹やまふ山吹を紫に花 五 太祇

俳言雜選

三九

俳言雜詠 卷一 春

茶摘

夕陽を惜み小なるぬ、神若
茶摘舟も巽よりや宇治の里 尺布
宵多煙やいふ尾おれ茶摘舟 けふ
一日乃尻くらねよ茶摘つら 必化

春山 春野

月几小日のき淡し春の心 太祇
春の心又いふをれ隠れきり 嘯山

春のおやくらむく機嫌ふ 孤山
吹之く柳く柳火の千より集 遅笑
焼那糸いんくちふれ返る中 雁宕
苔のふれ石や焼那の友うこ 武然
野と行く盲のぼりまきへち 梅史
春の柳よ蛇のふるくねられ 李夫
壬生念佛
許希絶の若小神も壬生念佛 召波

月替所選 春

四

たぐし不揚をぬき生の猿 尺布
都くとはと云はるる言をよむ 嘯山

藤

花のたれをうて連ふおれを里 素園
漬をうて花高うる流う都 瓜流
大嶽や舞小春をきく花の死 孤桐
ひさしくもるくわたり花の心 李流
はもさるるうらみ花の二面式 它谷

お色し花をゆらりと揺るる 嘯山

傀儡

山猫のしる昼鮎や傀儡師 雁宕
兵れをいれにけし傀儡師 卯雲

雑春

粥杖や後を法系小とし春 龍眼
一室の空を揺るや命小神 富水
おはくやさるるぬたまきけ 太祇

苑大坂意前くを這はる遊ふ

銀獅

言婦や涙く日のさす二の誓り

吞獅

ゆくとまよ二日冬れ事り多り

大夢

一月の白く二月の礼者之部

它谷

物来りる屋根をおらねの心願鳥

此流

又事とし歎くもをと持よ事り

支鳩

重の物はるはららぬ被存式

赤羽

婦甲は小揚草をく庭りきり

嘯山

去の如くはれ女珠をさりしゆ

五鳳

海く連く交節も来小きり二の智

太祇

おときりは依えの志右灯りきり

田福

耕やしし右京の去れ純

太祇

芦の維其のままれ新りきり

雪蕨

な角りける内のあやみか本垣

巴東

炉塞や裸櫓の十日やも

嘯山

まふ島や巨壺をままを後らり

希因

蜺貝さくわくまもくく鳴古なり 無名氏

さよのふし連翹の花あまきり 堇帑

好のまよとくふくやも極飯 同來

安良や吟一休乃まよし新 羅人

糸海やつれまよわくみく遠 孤舟

暮春

一日と揺る日ハくまらね思 貝錦

蒲ふとくま白頭よまよ乃ま 召波

ひまると大わらわの柳 柳の柳 嘯山

かふるまよと金波や後一守 太祇

うふ耳のまよをゆりて仁回ま 蕪村

飼る乃みとおまよとま言わ 赤羽

ゆまや牡丹もぬる人こま言 賈友

えん是程もまよとこれの鐘 羅人

日派来る嘘の湯治やま言ま 孤桐

まよとまよとやゆくま人ひま 子一

われまゝはるまゝのいそぎひる	蓼太
寐つらくはるまゝのいそぎひる	存義
ゆきや竹のうしろのいそぎひる	鳥西
蝶をよもはるまゝのいそぎひる	大夢
ひまよかゝる風情やおひの蝶	蛾眉

新選卷之一終

俳諧新選卷之二

夏部

更衣

下りの働ひをゆる裕う那	龍眠
雪の紫のほろゆる衣文	沙月
寝衣をゆる裕う那	貝錦
涼入の黄麻をゆる裕う那	孤桐
古のゆるゆるをゆる裕う那	玉壺

古御系と下る附と二御系と下る附若くは裕裕邦 宋阿

裕裕とく刀刀不不ずれる裕裕子 尺布

汗汗は打打し肩肩衣衣古古神神裕裕 五始

物物巻巻江江衣衣の仕仕裕裕也 衣衣文 太祇

道道とくも裕裕とく自ら裕裕也 珪琳

瘦瘦肉肉の森森とくあがる裕裕とく 志昔

とく風風とく吹吹れとく裕裕とく 呉雪

法法衣衣の經經神神也 神裕 之房

衣衣文文衣衣面面のの鳴鳴さくわとく也 羅人

子の傍傍とくとく母母也 衣衣文 雲扇

卯花

卯卯ののもろもろ香香也 卯卯れれのの古古布布子 瓜流

とくとくもやもや屋屋上上人人の下下屋屋浦浦 土髮

卯卯のの花花也 玄玄龍龍寮寮ののかかひひ也 嘯山

牡丹

ううからから中中小小物物移移く 白牡丹 菜根

鮫尾しるまは牡丹のたえり 赤羽

唐音とらーまに牡丹式 管鳥

夜ふそぬうらふ月のみ牡丹式 花雪

ふいしうたの玉様なりを 嘯山

鯉生けく人まの庭のたえり 多少

袴そぬ條柳き牡丹る 嘯浦

法小姓の身は輝をほえり 之房

牡丹との又我とおや意所 紀逸

押出さる花一輪の牡丹る 春來

しらけを母りなるとんお 大夢

一輪小法門と字を牡丹る 其風

大や小風とわつるをん式 子江

鎌の久婦森余る牡丹る 素園

をふくぬとくじ牡丹る 其流

つくまはる花をさる牡丹式 太祇

山里にそくのぬ花や牡丹細 吞獅

素ノと蝶のあつらへんる 潭蛟
 ちり牡丹えんれ容よ並らん 尺布
 一輪小一白いさねりん 龍眠
 牡丹あつくおきりぬ二之片 蕪村

瞿粟

むくく風とまきやう島 修古
 浮橋ゆとまきね春まきうのも 伏見 雨谷
 んれとも葉まきねれりきの花 鶴英

是初の蒼小きの一きうら 斗吟
 妻門のあけの風やうの毛 ひさし 千苓

時鳥

友や紀いおはは合やうお守 瓢水
 けをいれを子の耳とくも 羅人
 ぬもくぬりやや杜宇 富葉
 んとけぬあまうしやまひ 賀瑞
 子規あまうらうらうら 貝錦

俳諧新選

声 清くしるる水の杜鰲 紅日神 一夕房

今 伏勢の神引あり ありて あまの 嘯山

見 て 空 し 江 を 考 も され 時 多 之房

同 と 人 を 汗 を 寝 た り 郭 云 雅因

時 鳥 多 入 き く カゴ 只 人 人

頂 を 懐 飲 山 ほ け く 次 城端 而章

新 と 呪 咀 の 汀 の 指 たり 儿董

忽 と 一 通 入 り 利 里 や 時 多 沙月

者 く 了 す 孫 く され 夢 や 杜宇 帛友

峰 も つ れ す 鮫 も 連 は 時 多 雁 宿

本 兔 の 目 を 了 る 夢 ふ 夢 あ 寺 青 蛾

小 傍 を け 夢 と 孫 ぬ 夢 た 時 多 存 義

川 を れ 白 く 鏡 を け く 夢 た 移 竹

蜀 魄 を 了 る 夢 と 野 山 而 白 く 野 右

提 灯 を 燈 を 了 る 夢 と け く 寺 它 谷

夢 登 も 己 の 夢 を 了 る 夢 と 宋 屋

まけいふんふんらや 部云 孤桐

けり樹とささや 鳴るや 阿誰

枕よりくく ぬねまや 杜宇 龍眠

妻をくく 啼もささ けり 嵐山

かきく 守かきく ぬねま 太祇

杜宇 桐まきく ぬねま 希因

鳴るく ぬねま ぬねま 雪蕉

雞の声つとや 耳や 時鳥 素園

耳塚よりくく ぬねま 露吹

つとくく ぬねま ぬねま 猪草

若葉 菱木立 若楓

法向山 桐の中より 葉の如く 蕪村

向ふ日の此白く ぬねま 若葉の如く 柳女

を肩環ゆき ぬねま ぬねま 卯雲

今頃と ぬねま ぬねま 右流

山寺より ぬねま ぬねま 嘯山

ゆひなくさのつ追ふ若葉式 鴈嘴

さくらのらるる若葉やゆれん ふゆく月のあけのこころ 孤桐

日の柳の影さくさくわさる とよ路 渠柗

花の木のむくさくさく若葉式 田福

凡ふ隣とくつきさく葉式 志昔

むかひのつとむかひのつとむかひ 大坂 吾雪

雪とさくさくさくさく 大坂 卜我

はんとらとあはれさくさく 大坂 麥翅

あのみとさくさくさく 大坂 恩情

井堰のつとむかひのつとむかひ 大坂 雅因

花の木のつとむかひのつとむかひ 大坂 太祇

新しらねさくさくさく 大坂 未人

牛鹿のつとむかひのつとむかひ 大坂 銀獅

花の木のつとむかひのつとむかひ 大坂 尺布

さくさくさくさく 大坂 嘯山

志の算の川本のつとむかひのつとむかひ 大坂 多少

くさくさ温泉の煙やまふまを 中 李有

たききり目と体さきり若胤 其丸

何のあしむね炭乃煮りし 麻兄

灌佛

汗水とやきり示寸解れ 青魚

春家く楊子にの紅ふ 嘯山

燕子花

子鳥ふわさるね梅や漢子も 孤山

しぬ小鷹ぬたむかひつゝ 中 漁焉

杜若さくらお目れゆるさ 中 高平

わさやふ路をほや薬子丸 龍眠

伝田くの琴も如やかきり 中 瓢水

何頃の逢自くや 中 阿誰

杜若は跡を泥まきれり 潭北

はらぬ心む下り 中 自友

似たりとら古人の影おたき 中 嘯山

鷓鴣

大石のゆるき	可捏
鼓舌	友山
竹友	花眠
子曳	和流

飯越の座	蕪村
------	----

初鰾

菜陽	宋阿
----	----

矢数

吳郷	沙殘
----	----

射下いし名をそふるま打祭大坂才之

葵祭

おとけさる家と後もえさり 赤羽

葵車はふく後と投りて 孤桐

楽人の情のうや加茂祭 嘯山

追及と地さうもあも葵祭 太祇

蝙蝠

蝙蝠や地さうもあも大坂周禾

蝙蝠や水さしれ橋のう 之房

かきあはせのやまのりる麦埃 麥里

蝙蝠や河至院のとり新 嘯山

らりりのゆまのねお釣の月三原社中

筍

笋や新し遊ば疎まき 多少

筍や桶と桜抄のゆきあり 龍眼

筍や口締り連る新海し 武然

羊や牛の骨 嘯山

芍藥

芍薬と云ふは芍薬の根也 龍眼

芍薬の葉の傍に日南斗 太祇

芍薬や根下ほほ若くはりる 嘯山

蝸牛

蝸牛角の中心を杖蟻 尺布

蝸牛の角をさす所の地牛 田福

谷破るの草や通し 地牛 百里

地牛の草をさす所の地牛 青蒲

地牛の草をさす所の地牛 一兔

地牛の草をさす所の地牛 志昔

地牛の草をさす所の地牛 紫水

地牛の草をさす所の地牛 赤羽

地牛の草をさす所の地牛 半魯

地牛の草をさす所の地牛 土髮

地年いふれぬかしり
 李流
 高橋のわたり
 嘯山
 枯きり
 雁背
 太
 角
 召波
 白芽
 雁宕
 才之

角
 移竹
 孤桐
 無名氏
 端午
 草中
 草
 瀾湖
 富水
 麻兄
 嘯山

非番所撰
 三

我海へ懺みし来り紺屋式	沙月
知と入る女伎の兜下菊	存義
ひめめ美首くるとり席子	素園
ゆらあれと踏小唄る	鵲二
糞と歌女と地者うね	鶴英

競馬

比ま津ぬ蹄の風やうへる	孤桐
目のとく事くうまに競る	李流

肩ふりてはうくおとゑ競馬は 岸指

麥姝

麦結しとる無形る年姝一	大夢
麦うらむ詩くゆと睡く声	移竹
化縁して麦うら省の女ノ那	坡仄
麦ふりや新と連るる姉妹	太祇
麦れ穂のちとくしと和と合る	白芽
巡程を度れハ丁と麦の好	社中

まねやけいしりふく 存不也 嘯山
一人しゆふしけいふや 麦の秋 大振 來槎

田植 早苗

神の田やうげのよき植ふまき 大勢 青牛
りくしめく 秋まき 田植ふね 太祇
まふも亦長のえりふ 早苗式 麥翅
浪木のまふ守り 田植奇 二 柙
まねのけいしりふく ヒツ中 ト 友

鷗も今葉まき 田植式 廬鳳
秋風とけいしりふく 田植ふ 明五
辛まき 秋まき 田植ふ 貝錦
秋化のまき 金まき 田植式 嘯山
帆まき ね帆まき 早苗式 沙月
面のまき 早苗まき 田植式 雲魚
まじやまき 早苗まき 小早系 存義
清まき 早苗まき 亦ある 田植ふ 支鳩

宵のふも田平 是のふりて 之房
松竹とともる 書やれのけ 龍眼

照射 火串

晴れ初し比の利と博を照射外 它谷
武士のふれ難きも 塔ろりのりか 太祇
百姓入りら 矢物中なる 照射外 召波
里るくくみくくも 方を串式 御風

螢

火と奉て実のふるもや 飛螢 太祇
螢火やまれば 庭なるもろろも 赤羽
飛ゆる 松の庭より うれしき 嘯山
飛る雲 鳴る鳥 とも けり 只義
常なる 羅 ぎふ みの中 同 珊雪
銀さの 白を 照し 松樹 石田井
子た 自懐 ぬき ぬき ぬき 百万
は 葉 ぬき ぬき ぬき 里楓 山

愚水	河星	紫水	瓢水	移竹	水柳	支鳩	瓜流
水	星	水	水	竹	柳	鳩	流
水	星	水	水	竹	柳	鳩	流
水	星	水	水	竹	柳	鳩	流
水	星	水	水	竹	柳	鳩	流
水	星	水	水	竹	柳	鳩	流
水	星	水	水	竹	柳	鳩	流
水	星	水	水	竹	柳	鳩	流
水	星	水	水	竹	柳	鳩	流
水	星	水	水	竹	柳	鳩	流

李流	左鈞	孤桐	魯堂	樓川
流	鈞	桐	堂	川
流	鈞	桐	堂	川
流	鈞	桐	堂	川
流	鈞	桐	堂	川
流	鈞	桐	堂	川
流	鈞	桐	堂	川
流	鈞	桐	堂	川
流	鈞	桐	堂	川
流	鈞	桐	堂	川

五月雨 五月間

超波	必化
波	化
波	化
波	化
波	化
波	化
波	化
波	化
波	化
波	化

五月雨

五月間

めしむや水と露り茅の寺 雅因
 ささけりりふらん竹生鳴 サカ 喜水
 とらふく初ねややうりる富水
 船の尾根にありあつる月晴 李夫
 橋はきりちたらしめらる一歩 岩
 蒲洲の松直なりや五月雨 卯雲
 入梅の雲にさしきたるけしき 富天
 浮城乃春のゆるゆるありる 比叅

中月也 遊とある月の年 河星
 川くちを屋らうる月夜 社 社中
 ささけりりふらん竹生鳴 蓼太
 雲けりりふらん竹生鳴 沙殘
 船橋の人と抱つる五月川 宋屋
 舟にささけりりふらん月夜 三 三笑
 川端を流るる橋や五月雨 一 一和
 加茂人の初泊やうらたぬ 習先

けしとらや下まきとら	大
のた	夢
目小を記少戸の事	変
やありぬ	翅
やありぬ	万
橋	富
海入川の渦りや	水
又月雨	嘯
壙貝の氷乃渦りや	山
ありぬ	龍
眠	水
翁	羅
月	若山

けしとらや	太
ね	祖
ぬと中を橋く	未
らぬ	人
友のまれ	之
振り	房
比	松
山	嘯

集書

魚やう	此
流	蕪
味	村

竹言集選二

月しら四方りもなるあまさる 太太祇祇
山山後後ととああままささららああままささらら 嘯嘯山山

蚊 蚊 憾

蚊蚊ををううちちもも朝朝！！ゆゆししくく夜夜馬馬 富富葉葉

少少もも自自ららああままささららああままささららああままささらら 嘯嘯山山

ああままささららああままささららああままささららああままささらら 太太祇祇

ははんんたたももれれああままささららああままささららああままささらら 迂迂童童

ああままささららああままささららああままささららああままささらら 菜菜根根

おお撲撲五五投投くく金金ささりりああままささらら 希希因因

ききくくくくわわたたやや須須磨磨ののああままささらら 梅梅史史

深深家家ととああままささららああままささららああままささらら 杜杜支支

ああままささららああままささららああままささららああままささらら 召召波波

ははんんたたももれれああままささららああままささららああままささらら 雁雁宥宥

ははんんたたももれれああままささららああままささららああままささらら 嘉嘉栄栄

ははんんたたももれれああままささららああままささららああままささらら 李李流流

ああままささららああままささららああままささららああままささらら 土土髪髪

難乃也。せらる。羽。尺布
 蚊。白芽
 後。蕪村
 市。翠如
 帳。一兔
 故。子一
 橋。田福
 水。雨谷

短夜

短夜と蒸れ。楮林
 水。鳥栖
 短夜。李流
 短夜。麦翅
 短夜。嘯山
 短夜。移竹
 若竹

作
 若竹
 夏

風戦も光陰の去りしは竹 城端 五好

月よと接し風情も今年亦 廬鳳

今物も色は風も飛つては竹 斗吟

こ中よとやいしは竹 季遊

と竹も月も亦幅のわたりも 周末

恙非や新鳴もく午時の月 移竹

わ竹も流しもきれか竹母 宋阿

も竹としるもえや凡乃月 孤桐

わ竹の口毎もかりる戦はうね 尺布

恙竹もさきか竹も一置か カノ松 社中

ねあし竹も竹もあふんがー 存義

竹の枝も竹葉のまきされり 習先

鶉飼

鶉も飼つても白練の這も取れぬ 雪蕉

こゆのこも子も考く鶉飼亦 直生

名も小ぶると身は竹 鶉飼 カノ松 素行

百合草

あやのたむくやてあうりさ 尺布

あやのたむくやてあうりさ 赤羽

あやのたむくやてあうりさ 孤桐

紫陽草

あやのたむくやてあうりさ 大坂 梅從

あやのたむくやてあうりさ 筆陽草や香山居士と名づけ 嘯山

水雞

あやのたむくやてあうりさ 宗雨

あやのたむくやてあうりさ 樂水

あやのたむくやてあうりさ 太祇

あやのたむくやてあうりさ 露秀

萍花

あやのたむくやてあうりさ 嘯山

あやのたむくやてあうりさ 鶴英

あやのたむくやてあうりさ 七言 圭左

復月

復の月十圍の樹下乃日外	鳥栖
掃かく似くともや、あは月	舞閣
掃ふ子拘や、あは復の月	大夢
あは月、あは月の初を也、帝下	守一
生中へ、あは月、あは月の	龜ト
裸く、あは月、あは月の	維駒
あは月、あは月の、あは月の	麻兄

あは月の水邊、あは月の	它谷
あは月の、あは月の、あは月の	梅四
あは月の、あは月の、あは月の	富水
あは月の、あは月の、あは月の	太祇
あは月の、あは月の、あは月の	桺水
あは月の、あは月の、あは月の	嘯山
あは月の、あは月の、あは月の	沙月
あは月の、あは月の、あは月の	太祇

非言所選

七五

復至

復至の日は所ゆく馬の息も
賈友
日輪の光を極くしるる
凡流

復州

復州の日は所ゆく馬の息も
光甫
日輪の光を極くしるる
素雪
榮瀧
嘯山

蟬

海邊に蝉の告げの聲
凡流
なまの蟬の中に鳴るる
雲魚
葉柳のふりそよむる
春來
蟬の経をたたく
古津
ふるけの樹に響き
稻起
法界の心も初に樹の蟬
楚江
ふるけの樹に響き
孤山

非言集

十四

まろ蟬の音をききしむら 嘯山

蟬の音や古御よをいし里塚 愚水

蟬をきくはけをいし里塚の音 二柙

岩の亀の畑れ中やせしれしと 鶴女

池のまゝ扇もや畑れ死たのり 翠行

扇

秋画く人れをきき死れ 五鳳

扇上の涼をきき死れ 百万

ししとやの涼をきき死れ 存義

世の涼をきき死れ 嘯山

ふとと涼をきき死れ 雅因

余の涼をきき死れ 移竹

涼をきき死れ 之房

うしろの涼をきき死れ 鷺水

詩をきき死れ 砧舟

葉をきき死れ 赤羽

團

管絃の皆將く^三好^三團^三の式
 宋阿
 邦く^三好^三く^三好^三の^三好^三の^三好^三
 文誰
 好^三く^三好^三く^三好^三の^三好^三
 太祇
 好^三く^三好^三く^三好^三の^三好^三
 土髮
 好^三く^三好^三く^三好^三の^三好^三
 依貞
きくしんや美人の好團
とれあわらるるを
 季遊

しろくき要り^三好^三の^三好^三
 卯雲
 好^三く^三好^三く^三好^三の^三好^三
 白芽
 好^三く^三好^三く^三好^三の^三好^三
大塚
 紹廉
 自南^三好^三く^三好^三の^三好^三
 習先
 好^三く^三好^三く^三好^三の^三好^三
 孤桐
 好^三く^三好^三く^三好^三の^三好^三
 蕪村
 好^三く^三好^三く^三好^三の^三好^三
 可幸
 好^三く^三好^三く^三好^三の^三好^三
 萬翁

非言家道

在六

白晴れ干川もまらわいのね	尺布
政中。後けてはるるのね	宗專
政経くはつくるるあつた	元阿
日さすふらやのほろろ	此流
え食のせらと宿屋よ是うね	麥翅
茶けらるの刺よのね	嘯山
川多とけらるるあつた	南鳥
光さす。向く森のるるを食ふ	李流

新ふり杖も水御よわさるね	春來
多垢の白けくるるあつた	青咲
地牛入の葉もや田かあつた	珍志
村くの葉も乾くまらあつた	管子
湖の白樹もまらあつた	篤羽
小山もあつたあつたのね	大夢
自もはるるあつたあつた	龍眼
やまもあつたあつたあつた	江橋

夕飯をいやく接納しあつた	支鳩
本と名づく地の地と這ひあつた	支鳩
方へつるを至るをいふ	子一
妙を渡す時をいふ	子一
障りなきをいふ	雅睡
沼好れぬをいふ	太祇
やのまここれよと考れあつた	之房
なると信る船をいふ	沙月

地のもたし居たり	山峯	沙龍
てまきやがらう	青のまのま	移竹
海しと人のなれ野や	まのま	李文
いしとまのまをいふ	雲乃集	麻兄
こまは山嶽のまや	まのま	世二
ふかのまをいふ	まのま	孟遠
物吉し	箱根	嘯山
温泉のまをいふ	まのま	茶裡

留士ありて 忘れ隙や ことのま 可幸
日影や くれりて 草花も 富葉

涼薰風

月影く 映る水や 夕の光 無名氏
すしき 川を流る 水乃声 錦水
美しき 糸へ 結ぶく 淨い 舟のぬ 羽幸
いねの 流る 少ゆれ すと ぐり 它谷
漱石よ 弘葉 けく 涼き 尺布

今桂の 竹まき ありたり 夕の光 柳居

夕晴や 山成か すと ぐり 春歩

すしき 遠を 油守 木陰 梅有

茹 踏の 庭の ぬる 一 母す 百萬

馬の 尾と 鬣を 見る 門すし

全

松の 子す 子す 帷子 や ぬの上 嘯山

す 風乃 海り 竹の 影も 外 嘯雨

名も 皆く 子 別 行す 古橋

非 落 所 選 入 襲

三十一

けしきも秋と暮るる野原
周防 大島 楮林
 なき千代と早おきりし涼川
大島 秀山
 すしきやふのりつ帆影松
 梅史
 夕涼ゆきの門と雲れあり
若山 毛佛
 すしきや涼も海もよ瀬川
若山 春魚
 裸もそ懸れおしし門すし
江戸 孤桐
 すしきや寝る古き得のちい
江戸 溪梁
 勝とみれけりも松すし
 春來

川崎や舟く流紅の夕すし
多摩 杜支
 舟の多れち御く又けし
多摩 挑山
 すしきやみ露もる河甚
 篤羽
 とらくし石も眠るすし
 宋屋
 意行乃やとゆり夕すし
 龍眠
 夕風おけりはち涼くも
 琴和
三石菴 枝り庭掃せきすし
色紙 麦浪
 すしきや菽奴の多ふ夜すし
筑 市仙

海	水	の	清	し	記	各	の	音	一	簣
い	と	あ	や	の	た	や	下	涼	之	孝
す	し	や	和	ふ	初	り	し	也	素	園
ひ	し	ふ	わ	は	な	海	と	心	雁	背
風	す	し	み	き	の	塔	乃	あ	ト	友
晏	さ	自然	あ	ぬ	鴨	れ	海	れ	赤	羽
一	巻	し	風	と	ほ	り	る	を	水	翁
善	る	風	心	ら	い	是	乃	節	岸	指

善航し所産す如乃善りる 牛行

泉 清水 瀧殿

涼	多	如	す	毎	れ	流	や	泉	殿	赤	羽	
流	産	と	如	る	鳥	れ	末	の	物	尺	布	
船	を	り	く	水	浮	を	打	や	鳥	産	孤	桐
飛	り	く	あ	く	も	を	し	る	を	ら	嘯	山
流	産	や	た	あ	ち	を	ら	た	樹	を	全	
身	の	肉	れ	ら	と	さ	家	流	る	る	交	翅

馬の耳初割し ちる志しの邦 直生

く身みれれ 終はる度の 清き吹か 儿こ董たう

度たもも 清きををけけるる 清きとと清きををけけるる 大おほ夢ゆめ

茶ちやもも 湯ゆハハ 熱あつききもも ちちるる 野の右みぎ

るる 切きのの 齋さい次じ ちちるる 清きもも 清きもも 蕪う村むら

帷子

帷子ゐしのの 采さいハハ 一度いちど 下くだりり 沙さ月げつ

かかひひくく ちちるる 裸はだか 虫むし 季き遊ゆう

帷子ゐしのの 肌みハハ 食く入いるる 昼ひる寐ねるる 邦くに 尺しゃく布ふ

帷子ゐしのの 衣えハハ ちちるる やや 小こまま 孫まごもも 扇あふぎ色いろ 嘯せう山さん

帷子ゐしのの 衣えハハ ちちるる やや 小こまま 孫まごもも 扇あふぎ色いろ 赤あか羽はね

帷子ゐしのの 衣えハハ ちちるる やや 小こまま 孫まごもも 扇あふぎ色いろ 由よし來きた

蠅

身みハハ ちちるる やや 小こまま 孫まごもも 扇あふぎ色いろ 習しゆ先せん

身みハハ ちちるる やや 小こまま 孫まごもも 扇あふぎ色いろ 吐つ月げつ

身みハハ ちちるる やや 小こまま 孫まごもも 扇あふぎ色いろ 之これ房ぼう

罽とく山もまきりや突の人 太 祇

行舟の罽乃森耳し隣りきり 沙 月

女罽の志さく入や毛の沼ふ 嘯 山

白雨

夕まく形句の年乃度り 雲 魚

夕まやおのふけり 育 可 幸

夕まや物さけい草も本ま 篤 羽

後波うち朝ん霧の夕まうか 梁 直

江戸

ふるやんを物る田れ我ふ 風 鶴

与田

夕まよ傘乃亭むられり 嘯 山

高臺寺

夕まや膳室中の大書院 太 祇

祇園會

物さくけ白志厚し群乃見 鼓 舌

祇園まやこれ祇の人しきうす 鶴 英

字異り其ま勿偏祇園會 嘯 山

群よ知と見よんるれる同人 比 叅

舟洋やぬれ町とぬれり 李流
洋寇やいづれからんの布袴 習先

土用干

秋のそよ風も幸やち利干 鷺喬
冬もに例れ風もよち利干 多原 胡餅
幸抱くと笑との風もち利干 共 我即
ふとやすくよも風はち利干 嘯山
蚤干小春皆かふ垣根り外 太祇

虫干や地黒とこまも九十九隻 孤舟

蓮

蓮のちや旭のかか勅使門 大夢
人扱とちるれおちや蓮の老 它谷
起るくいと蓮の葉れるゆめん 芋秀
舟の中小舟と切とる蓮の舟 凡阿
吸ふるうらに毛了湖も蓮一か 蕪村

夕顔 晝顔

夕顔 晝顔

夕白れ内裏ふりぬき	夕白り裡のあふ小あけ那	夕白り都と一二解襪襟らる	夕白り藤るま後よ清と	夕白り互梳波よ揚れ下	夕白り白甲一人も挽人も	夕白り空門少年と折一飼	夕白り世のく登白嘆まきり
素狂	賀瑞	周采	沙月	梅從	孤山	龜	嘯雨

夕白りゆれく松花也伏る	夕白り肩ぬく女あひん
道子	此山

音田

夕白りく日小無あつる田子	夕白りまきくさの夕白り那	夕白り毎百あつくゆき	夕白り川を清き水経走
社中	吐月	紫微花	習先
			李流

夏ハまは始終や 百日紅 玉芝
 長のなるれ房おきられ様す
 百おきるるえんは花 莖う那 貝錦

瓜 若子

瓜披るお中の市や掌の月 羽律
 帯のせきく烟のかひも瓜依り 龍眠
 ぶりくく瓜々の流れも花の如 嘯山
 花も言色のたふふ花若子のふ 丈石

物々飽ころもろく 若子け 太 祇

心太

けまを海へかきくはやまもろえん 鳥 曉
 生物と捕ころもろく 柳鳴 緑
 名の中へぬやりきしころもろえん 太 祇

御 祓

川乱風の聲とを奪り清後うね 雁 宕
 懸くくくくくくくくくくく 嘯 山

雜集

るや事やもや買はれし乃毛	雅因
去ら水の海へ末や苔の花	可幸
照るよと影よ福はを葉はる	巴東
まほよまほは事らや〜乃山	如猿 <small>本符</small>
横に花は実を〜乃山	雪蕉
ゆに船は傍のよまら熱る子	橙雨
能と壁子よれ亦石をさす〜	百萬

あ〜小われものしを常角	孤桐
押あ〜車や〜や地よ糸	瓜流
糸は〜地よ〜も七と術	太祇
〜の〜れは〜師や馬	素園
糸〜実れ〜向〜に茨〜那	呂誰
娘〜の〜物〜は〜〜花	龍眼
い〜の〜も〜は〜〜ね刺や茨のむ	希因
ら〜め〜実〜已〜形〜の〜〜	沙月
ま〜は〜海〜あ〜〜し〜ふ〜ら〜ひ〜ら	

非指新集 八景 三十一

阿誰	阿誰	阿誰	阿誰	阿誰	阿誰	阿誰	阿誰	阿誰	阿誰
孤桐	孤桐	孤桐	孤桐	孤桐	孤桐	孤桐	孤桐	孤桐	孤桐
翠如	翠如	翠如	翠如	翠如	翠如	翠如	翠如	翠如	翠如
雲外	雲外	雲外	雲外	雲外	雲外	雲外	雲外	雲外	雲外
棹里	棹里	棹里	棹里	棹里	棹里	棹里	棹里	棹里	棹里
嘯山	嘯山	嘯山	嘯山	嘯山	嘯山	嘯山	嘯山	嘯山	嘯山
此流	此流	此流	此流	此流	此流	此流	此流	此流	此流

阿誰	阿誰	阿誰	阿誰	阿誰	阿誰	阿誰	阿誰	阿誰	阿誰
孤桐	孤桐	孤桐	孤桐	孤桐	孤桐	孤桐	孤桐	孤桐	孤桐
翠如	翠如	翠如	翠如	翠如	翠如	翠如	翠如	翠如	翠如
雲外	雲外	雲外	雲外	雲外	雲外	雲外	雲外	雲外	雲外
棹里	棹里	棹里	棹里	棹里	棹里	棹里	棹里	棹里	棹里
嘯山	嘯山	嘯山	嘯山	嘯山	嘯山	嘯山	嘯山	嘯山	嘯山
此流	此流	此流	此流	此流	此流	此流	此流	此流	此流

法也や 西も朽れ 花標 肥子 子雨

をらり 梅子の 死 答 早 平十

昔水や 露より ちよれ 思 守 守一

かゝる 船の 幸 死 南部 千重

川 折や 流と ちよれ 思 嘯 山

目 ふ く ま 上 追 く 瓢 う 瓢水

柳 青や 啞の 娘 け ひ く 蕪村

水 馬 く と 伸 く 休 あり 交翅

素 烟 小 含 つ 子 の 毛 虫 ふ 五律

沼 澤 や 藻 の 上 破 り ち よ 親 太 祇

川 青 の 答 り ち よ 親 剡 山

身 の ち よ 親 湖 曉

身 の ち よ 親 迂 童

俳諧新選 卷之二 終

